

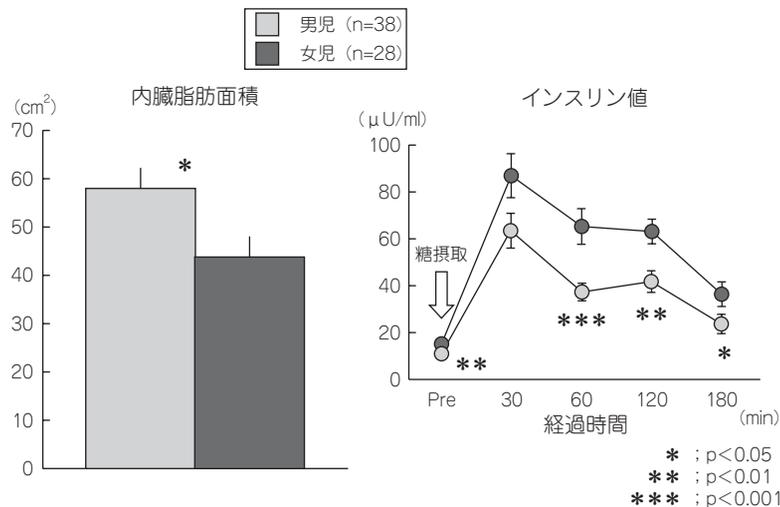
## 肥満小児のインスリン抵抗性 獲得における内臓脂肪の影響

研究代表者 三重大学 富樫 健二

肥満は、インスリンの感受性を低下（インスリン抵抗性を上昇）し、血中のインスリン濃度を上昇するため、糖尿病発症を促進することが明らかにされています。小児肥満では、対象患者の特殊性や分析の難しさから、未解明な部分が多い現状です。本研究では、小児肥満の患者（平均年齢  $10.2 \pm 0.2$  歳）の男児38名と女児28名を対象として、腹部脂肪分布とインスリン抵抗性の関係について分析しました。その結果、内臓脂肪の蓄積は肥満男児で多く、一方インスリン抵抗性は肥満女児において高いことが示されました。内臓脂肪量とインスリン抵抗性の関係は、肥満女児よりも肥満男児で高いことも明らかにされました。この結果より、肥満男児では内臓脂肪蓄積がインスリン抵抗性を強く誘発し、肥満女児では内臓脂肪のみならず、体全体の脂肪量や他の因子がインスリン抵抗性の上昇に関与することが示唆されました。



肥満小児のインスリン抵抗性は、男児は内臓脂肪の蓄積、女児は身体全体の脂肪量などにそれぞれ関係するようだ



内臓脂肪面積および経口糖負荷試験時におけるインスリン値の性差